

隠蔽された告白——

*Ada* (1969) の書き直された手紙と  
投函されなかった手紙をめぐって

中 谷 ひ と み

Suppressed Confessions :

Rewritten and Unposted Letters in V. Nabokov's *Ada* (1969)

Hitomi NAKATANI

Vladimir Nabokov の *Ada* には様々な手紙の応酬がある。うわべは従兄妹として育っているが実は兄妹である主人公 Van Veen と Ada Veen の間で秘に交わされる暗号文を使った多くの恋文、不実をはたらいたアーダがヴェンにあてて一方的に送り続ける必死に許しを請い愛情を取り戻そうとする手紙、異父妹 Lucette が彼に出す便箋十枚にも及ぶ熱烈な恋文、アーダの配偶者の死後ヴェンとアーダの間で交わされる折々の短信、ヴェンと彼の父や友人達との書状、ヴェン以外の登場人物達の間で交わされる手紙など、枚挙に暇がない。しかしやり取りされたこれらの手紙とは別に、伝達という手紙本来の機能を果たさなかった二種類の手紙がある。書き直された手紙と、投函されなかった手紙である。なぜ特にこれらの手紙が、書き直され、あるいは投函されなかったのか。そして、これらの行為自体にどんな意義があったのだろうか。本論の考察へと導いたのはこの疑問である。

1

心情を吐露する手紙は告白の一形態であるから「自己の深淵や感情や個人史を内省することで個を造りあげる手助けとなり」「主体の自己に関する本質主義的な考察を促す。」<sup>1</sup> そのような手紙や告白は、自己を客観視あるいは他者化することによって（ポストモダン流に考えれば「誤解」であろうが）自己理解が進む過程を示している。秘密を告白する手紙を書くことで内省と自己理解が進み、多くは望まぬ事実が克服され、個が形成されていくのである。一度激烈に事実を告白した手紙が、冷静さを取り戻した後に書き直されて穏便な内容に変わったり、投函されないことは、告白者がその事実の強迫から自由になった証拠であろう。

『アーダ』の主人公達の強迫観念は、何よりも近親相姦とその罪悪感であった。ヴェンは彼の道徳観ゆえに、アーダは平穏で幸せな後世を送りたいという彼女の願いゆえに、それに苦しめられた。アーダがルセットのピアノ教師や友人の Percy de Prey と情を通じたことを知ったヴェンは、怒りと嫉妬のあまり自暴自棄になり蛮行に及んだ結果、擦れ違っ

た見知らぬ男と決闘する羽目に陥る。生き残る可能性は少ない。そこで父 Demon 宛に書いたのが、自分とアーダの近親相姦の罪を告白する手紙である。

Dear Dad,

in consequence of a trivial altercation with a Captain Tapper, of Wild Violet Lodge, whom I happened to step upon in the corridor of a train, I had a pistol duel this morning in the woods near Kalugano and am now no more. Though the manner of my end can be regarded as a kind of easy suicide, the encounter and the ineffable Captain are in no way connected with the Sorrows of Young Veen. In 1884, during my first summer at Ardis, I seduced your daughter, who was then twelve. Our torrid affair lasted till my return to Riverlane; it was resumed last June, four years later. That happiness has been the greatest event in my life, and I have no regrets. Yesterday, though, I discovered she had been unfaithful to me, so we parted....Lots of flowers, please!

Your loving son, Van<sup>2</sup>

少々自嘲気味でも、この手紙からはヴァンの苦悩の程が窺われる。人生の終焉にあたって敬愛する父に近親相姦の罪を告白して、自殺すらしようとしたその罪の意識から開放されたいと願っているようである。しかしヴァンはこの手紙を注意深く読み返した後、破り捨て、書き直した短い手紙をホテルに残して決闘の場へ赴く。

Dad,

I had a trivial quarrel with a stranger whose face I slapped and who killed me in a duel near Kalugano. Sorry! (244)

この書き直しでは、決闘相手を指す固有名詞は「見知らぬ人」に変わり、その人の詳細な説明や言い訳じみた言葉は姿を消した。「若きヴィーンの不幸 (the Sorrows of Young Veen)」というような大仰なディスコースも消え、「この男が僕を殺しました」と自嘲的とも取れるが突き放したようないい方をし、決闘と迫り来る自分の死にまつわる事実のみが書かれている。そして近親相姦の事実は完璧に隠蔽された。ヴァンは自分自身と自分が招いた事態を客観視できたと言えよう。

妹との近親相姦はそれを社会通念上の禁忌とする父権制社会の価値観／「父」に対する挑戦とも考えられるが、ヴァンは意識的であれ無意識的であれ、様々な意味で父ディーモンに挑戦している。D. Barton Johnson が論証するように<sup>3</sup>ヴァンの父母は兄妹である。みずから近親相姦を犯しておきながら、父は息子にその行為を激しく非難し、禁止したのだ。ヴァンは自分の本当の母親が Marina であることを、そして両親が自分を叔母 Aqua の実子のように見せかけ自分と世間を欺いていたことを、幼い頃既に知っていた。アーダとの関係が父に知れると、熟考の末ヴァンは、アーダの将来のためにも父の言うように以後二度と彼女には会うまいと決心し、彼女にその決心を伝える手紙を出す。しかしその前に彼は、アーディスの屋根裏部屋にあった植物標本のことを父に話してやろうか、自分達の

子を妹アクアの子のように見せかけた結婚式のからくりを両親の前に突きつけて糾弾してやろうか、利口な実の子ヴァンとアーダが楽しくわくわくしながら集めたおまえさんたちの秘密の数々をばらしてやろうかと、意地悪くも思っている。息子は父に愛情と尊敬、憎しみや挑戦心という相反する感情を抱いていた。書き直された手紙は、父に近親相姦の事実を突きつける戦線布告でもあった。そしてその感情をも、自身を客観視することで息子は克服したのだ。

ヴァンはアーダに対しても、熱烈な愛情と憎しみの情を抱いていた。そして彼女から妹の死を悼む悲愴な手紙を受け取った時に、彼の投函されなかった手紙は書かれた。思いがけず愛しいアーダの出演する映画を Tobakoff 号の船上で見たヴァンは、巧みに自分を追って乗船し言寄っていたルセットを冷たくあしらうことになり、その結果、絶望のあまりルセットは自殺した。スチール製の箱に入れて庭に埋められ、1928年に掘り出された時、手紙は半ば朽ちていて彼の意図通り誰が誰にあてて書いたのかもわからない。

*My only love :*

*This letter will never be posted. It will lie in a steel box buried under a cypress in the garden of Villa Armina, and when it turns up by chance half a millennium hence, nobody will know who wrote it and for whom it was meant. It would not have been written at all if your last line, your cry of unhappiness, were not my cry of triumph. The burden of that excitement must be. . . [The rest of the sentence was found to be obliterated by a rusty stain when the box was dug up in 1928. The letter continues as follows] . . . back in the States, I started upon a singular quest. . . . I kept pursuing the picture which I had not [badly discolored] on the boat, from cinema to cinema, every time discovering a new item of glorious torture, a new convulsion of beauty in your performance. That [illegible] is a complete refutation of odious Kim's odious stills. . . . (392-93)*

ヴァンとアーダの近親相姦はずっと続いていたが、同時にアーダとルセットも近親相姦／同姓愛の関係にあった。不在のヴァンに替わる一時しのぎとして互いに求めあったともいえるが、二人が自分たちの関係を告白した時ヴァンがルセットに嫉妬したことは、容易に推測できる。アーダの情事の相手であったピアノ教師やパーシー・ド・プレに対して非常に嫉妬深かったヴァンである。彼はアーダが「とても自然に、陽気な女学生のようにエロチックに喘ぎながら、何とも言えないようにかわいく笑う映画の最後の場面」を「芸術的にも、情熱的にも、最高の瞬間だ」(393) と思っている。しかし彼女は、映画の中の無邪気な自分が、愛情を注いできた妹の自殺の真の原因であることを全く知らない。ヴァンは自分の愛を裏切ったアーダがこの上なく不幸であることの喜びと、無邪気で最も愛らしい瞬間のアーダに彼女が想像もつかない真実の、この上ない悲しみの物語を自分だけが語れることの喜びを、手紙の中で告白している。不実なアーダに彼は勝利したのだ。

しかしヴァンは、勝利の喜びを告白する手紙をアーダに送って真実を知らせ、憎んでもいた彼女にこの上ない精神的打撃を与え、復讐しはしなかった。とはいっても、彼の場合も、よくあるように隠蔽が逆説的に復讐を補強したのだろうか。確かにヴァンはアーダに

真実を知らせず、密かに、また憑かれたように、この後彼女の出演する映画を探し歩き、演技するアーダの生来の無邪気さの中に内在する人間の悲しい性、あるいは運命が引き起こす荘厳なまでの苦悩という新しい項目を、そしてそこに痙攣するような美をすら発見し続ける。より普遍的な人間性のドラマの語りを引き出していく。既成のアーダの物語を次々と、彼だけが語れる彼女の真の物語で語り直しているとも言えよう。嫉妬深いヴァンにとって憎しみや復讐心を昇華することは容易なことではなかったろう。しかし彼は物語の語り手として復讐以上の喜びを発見し、またその魅力を再認識したのではなからうか。読み手が想像もつかないような真に語るべき物語の存在を知り、それを自分だけが語れることを知ったのだから。手紙を庭に埋めた時ヴァンは、アーダに対する憎悪や復讐というマイナスに向かう衝動と決別しつつあった、あるいは決別したと考えてよからう。彼はこれ以後、語り手としての自分をさらに強く意識していったに違いない。

注目しなければならないのは、これらの書き直されたり投函されなかった手紙に隠蔽されている、そしてヴァンが乗り越えた、父に対する彼の挑戦心とアーダに対する憎しみや復讐心である。尊敬や愛情と表裏一体となっていたこれらの感情は、縦糸となり横糸となって『アーダ』という織物に織り込まれているはずである。問題がはっきりしてくる。これらの感情がヴァンの自己形成にどのような意義があったのか。手紙を書き直したり、投函しなかったことが、彼の個の発展にどう関与したのか。そして、『アーダ』のテキストはヴァンとアーダの禁じられた愛と家族の年代記を2人が語る物語だが、そもそもテクスチャーとしての『アーダ』はどう読めるのか。

## 2

母に対しては愛情も尊敬もあまり持たなかったヴァンだが、父ディーモンに対しては常に変わらぬ敬愛の念を抱き、彼の人柄や行動を賞賛している。ヴィーン家は昔のヨーロッパの王族にも繋がる貴族階級で、ディーモンは幾分俗物的な階級意識と優越感を持つ、成功した美術商である。特に好みの画家はいない。身も心も捧げる「肉体の詩人」であり、趣味は有名な絵を収集することに加え、若い愛人を集め侍らせることであり、中年者らしい卑猥な駄洒落が好きである。「威厳があり、縁起の悪い黒を着ると神秘的で、手に負えないエゴティストで、女には目がない。」<sup>5</sup> 父権制社会の典型的な父と言えよう。また彼にはメキシコの温泉やスパイスを求めて広く旅するような冒険好きの探検家の面もある。「灼熱の目をしたロマンスの権化であり、ナボコフがロマンチックな自分本位が人間の形をしたものだと考える」<sup>6</sup> ような人物である。

しかし興味深いのは、芸術に関するディーモンの考察である。彼は Hieronymus Bosch の公爵領の森を描いた名作を見て、そこに描かれている昆虫やツグミやアザミの中に芸術と科学——奔放なほどの想像力と科学者のように冷徹な観察眼による記述——が「近親相姦をしているように」(343) 相補い、調和していると考え。言葉使いや考察の真偽は別として、芸術の本質的な問題に洞察を働かせていると言えよう。文学に関しては、彼は「Dickens より Walter Scott を好み、ロシアの小説家をあまり評価していない。」(188) 芸術の受容に関する彼の持論は、作品の中に寓意や深淵で難解な意味を決して求めず、見て楽しみ、五感で感じ、あるがままに味わうことである。実生活でも芸術観でも、父は子供達に多大な影響を及ぼしている。例えば、ヴァンは性的に奔放であるし、偽物の芸術が嫌

いで、あらゆるものに寓意を探し出そうとする笑止千万なフロイトの精神分析に我慢がならない。

一方、母マリナはヴァンの辛辣な批評によれば「粗雑な精神構造をした」「もともと人間の扮装をこらした替玉人形」であり、「それなしでは記憶というものがステロ版か切り抜きページでしかないような第三判断力（個人的で魔術のように微細にわたる想像力）が欠如している。」(199) 素晴らしい即興演技がいくつかあるものの、彼女は凡庸であると言う批評から生涯逃れられなかった二流の女優であった。

ヴァンとアードは、多少とも芸術に携わり芸術を論じる両親の子として生れた。恋の情念とライムライトに彩られた母の人生のプロットを再演したのが、娘アードである。象徴的にも、マリナが25年間に及ぶ女優生活を閉じる1891年は、アードが自分のそれを始めた年であった。擬似芸術家の父の一生を踏襲して、さらに真の芸術家として人生を完結しようとしたのは、息子ヴァンである。母と娘、父と息子にはそれぞれ共通点が多い。例えば、前者の二人は子供時代植物に関心を持っている。長じて恋多き女性として華やかな生活を送るが、二人とも二流の女優で終わった。後者の二人は、前者に劣らぬくらい多くの情事を重ねたが、そのために脅迫されたり決闘したりしている。

しかし成長したアードと「彼女の源であり、模範である」<sup>7</sup> ディーモンにも、重要な共通点がある。アードは子供の頃、何かと理屈をこねたり、博物学に興味を持ち、ランなどの植物を緻密に写生したり、虫の幼虫を飼ったりするような、ちょっとした科学者だった反面、この世にない植物の絵を想像力豊かに描いたりする芸術家の一面があった。ただし成長した彼女は理性的というよりは感覚的である。互いを比べてみると四人の親子にそれぞれ何らかの共通点があり、親の特徴の発展が子供に見られるのは当然であろう。ディーモンがボッシュの絵で思いを巡らせ、自分の子供達に混沌と根付けた芸術と科学に向かう傾向が、ヴァンとアードに脈打っている。ヴァンは父母やアードよりもはるかに緻密に、科学的あるいは論理的に、芸術に接近している。『アード』は彼が父母、妹、異父妹との関係を通じて物語芸術や芸術家を哲学的に考察し、*Lolita* (1955) の Humbert Humbert のように<sup>8</sup> 真の語り手／芸術家になる物語なのだ。

幼い頃アードほど利発でなかったヴァンは10才の時、数学や文学（特に暗唱）、演劇、ミュージカルドラマ、手品、ボクシング、曲乗りなどいろいろな分野に著しく才能を伸ばした。長じて彼は「次元と狂気」(286) に関心を持ち、精神医学の教授になり、臨床にも携わる。触感によって色彩を知覚する興味深い症例を扱っていてもいる。またベルグソンばりの哲学的時間論を展開する理論家である。17才の時、アメリカ人として初めて「狂気と永世」というテーマでダッドレイ賞を受賞して以来、多くの専門論文の著作、講義、哲学論考で有名になった。しかし彼は「自分が学者であるというよりは芸術家である」(370) ことを強く意識してきた。いかに学術論考のように見えても、公にされた自分の論文は「学者による認識論の研究というよりは軽妙で好戦的な文学スタイルの実践である」(452) と考えている。語りの様式を模索してきたのだ。ここで思い出さねばならないのが、手紙を投函せずに埋めた時の彼の成長である。

ヴァンとアードは今や90才を越し、彼女が夫と死別してからは共に暮らしている。彼は小説の虚構性、言語、芸術の諸媒体、様々な語りの方、そして記憶と時間の不可逆性などの問題を考えながら、アードの協力を得て家族の年代記を語っている。「97パーセント

の真実と3パーセントの不確かな」(445) 記憶からなる本だと予告される『アーダ』を語っていくうちに、二人は「大事なのはテキストの正確さではなく、語りのテクスチャーである」<sup>9</sup>と考えるようになった。二人は、できるものなら、死んだ後「それが天国であれ地獄であれ、語り終えた『アーダ』という本、その散文、あるいは本のカバーの推薦広告文になりたい」(460)とまで思っている。

ヴァンとアーダは子供の頃から興奮を求めて様々な本を読んでいたが「多くの有名な作品もわざとらしく、退屈で、うっかり間違いがある」(107) ことを見抜いていた。家庭教師の Larivière 嬢の感傷的な小説についても、はっきり特定できないまでも「後で彼女の小説にリアリズムが欠如しているのだとわかるのだが」欠陥があることを直感した。彼らの批評が的を射たものかとはともかく、これらのエピソードは二人が生れながらに語りの芸術家の素質を持って生れた証左であろう。しかし子供の頃からいかに早熟で、大人の読むようなポルノグラフィーを見慣れたり、小説を手当たりしだい読んで批評できても、二人とも日記ですら思うように書けなかった。アーダの日記は「たいい植物や昆虫のことを書いた数ページより先には進まなかった。自分で再読してみると、その調子が置き物でいやに潔癖ぶったものだと思ったからだ。」ヴァンは自分の日記をすべて破り捨ててしまった。「ごちなく少年っぽい文体が不注意で良くない冷笑癖とあいまって、ひどいものに思えたからだ。」(88)

ヴァンが語りたかったことは何よりも、1884年14才の時にヴィーン家のアーディス邸の東屋で12才のアーダとシャッターりんごの木に登って遊んでいた時に経験した、言葉ではとうてい言い表せないような思いであった。木の枝葉の中でふざけていてバランスを崩した二人は転げ落ちそうになるが、間髪を容れずバランスを取り戻した。その時彼の顔はむき出しのアーダの足の間にある。それまで感じたことのない激情に駆られて、彼はいとおいしく思っていた彼女の首筋や、足の内側、そして身体のいたるところに、接吻で彼の愛と情熱を語る。彼が唇の下に感じた恍惚感「これまでになく甘美で、熱烈で、神秘的であり」(81)、その前の冬に性交した売春婦に対して抱いた思いとは、似ても似つかないものである。この時彼は「自分たちの愛の物語の中で、初めて、高揚した詩のことは持った天才が天恵のように自分に舞い降りてきた」(98) ことを知る。語り手／芸術家の萌芽である。

甘く強烈な思い出とともにアーディスを去る時、ヴァンはアーダに対する思いを詩に託そうとしている。「アーダ、僕たちの東屋での愛」と書き始めるが、あとは続かない。鬱蒼としたりんごの木の中で体験した、臓腑を掴まれ激しくゆすぶられるようなリアリティ感——語りえぬもの——を、何度も彼は所与の言語で表現しようと試みる。しかし言葉は彼を裏切り続ける。長い人生を通して言葉に関する夢を何度も見るほどに、語りの媒体と方法も彼の強迫観念となっている。英語、フランス語、ロシア語など、多くの言語を知ってはいても、自分の「ことば」ではない。彼には自分の語りか、論理や統語法などの点で非常に複雑で、飛躍があるように見え、物語に血の通いが感じられない。自分の書いた『テラへの手紙——哲学的小説』と、アーダが書いてよこした彼女の不実を弁解し彼の愛を取り戻そうと躍起になっている手紙を比べても、彼女の言葉が「呼吸し、悶え、生きて」(265) いる様に思える。

アーダは自分の「ことば」を獲得していたのだろうか。彼女は子供の頃、ヴァンやルセットとは異なり、言葉遊びのスクラブルに非凡な才能を発揮した。チェスに関しては問題の

一面しか見ることができなかつたため得意とは言えず、むしろヴァンの方に才能があると思われたが、ことスクラブルとなれば、彼女は全く「優雅なコンピューター」(176) のようであり、時には巧みに新語を作ってみせた。ヴァンが認めるように、彼女は言葉に関する才能があり、複雑な知識の持ち主で、「最も純粋といえる哲学を考えつくようなタイプ」(63) だった。しかし所与の言語を使ったアクロバットがいかにもうまくても、彼女はその言語で書くことが話すことよりはるかに難しいことをよく知っていた。日記ですら思うように書けなかつたように、彼女も自分の「ことば」が見出せてはいなかつたのだ。

『アード』における二人の語りはどうかといえば、日記ですら思うように書けなかつた二人であつたために互いに記憶を修正しながら口述筆記させる語り (oral narrative) の方法を選択せざるを得なかつたことを斟酌しても、洗練された語りとは言ひ難い。全体の語りの半分以上の量を占める第一部から第五部へと緩やかに核心に近づいていくに従い、冗漫さや粗雑さは減っていくが「口述筆記される物語の小説的テーマは、まさに今弾みがついてきた」(227) とか「小説構造の描写を続けると…」(197) というように、生硬な語りが時折見られる。人間の意識と記憶という「奇妙な宇宙を訪問する探索者」(87)、あるいは「秘密の観測所」(139) の観察者であるヴァンとアードは、それらについて語る自分自身の「ことば」を模索している。『アード』のテクスチャーは主人公達が語り／芸術の言語を模索する物語なのだ。

### 3

ヴァンが父に近親相姦の事実を告白して自分を裏切つたアードに対する憎しみと父に対する挑戦心を露呈する手紙を書き、冷静になってそれを書き直したことは、テキストのレベルではヴァンが客観的に自らの強迫観念や願望を知り、自己の理解を深め、これら否定的な感情を克服して成長したと考へた。語りの言語を模索するテクスチャーの文脈においては、これはどう読めるのだろうか。

近親相姦を禁忌とする「父の法とは、同時に、まさにその言語であり、父の子はそこへ入って」<sup>10</sup> いった。しかし父の言語に参入した息子は妹との禁じられた愛の物語を得る。互いの愛を語り、それを維持し、発展させるために、息子たちは自分達だけに解る言語 (暗号) を用いる。禁忌を犯し父の言葉に挑戦し続けることは、テキストのレベルで二人が近親相姦の愉悦に密かに浸り続けることとパラレルである。物語の語り手である息子は記憶をたどって、りんごの木の中で体験した二人の愛の原点である、あの「語りえぬもの」を言語化したい。そのリアリティは性交を通して何度も体験できるものだと思つている。しかし所与の言語で「語りえぬ物語」を語るには、英語やロシア語のディスコースを支えるロゴスと線的時間の概念が彼の前に立ちふさがる。ロゴスは「語りえぬもの」を語ることは無力であるし、時間は遡及不可能である。暗号文の伝達も母体は同じロゴスであるので、真の言語とは言えない。しかも、無力な言語とはいへ父の言語が法であるかぎり、息子は法を犯し父に挑戦しているという罪意識から逃れられない。そこで、生死の分かれ目に際し窮した息子は、父に自分の罪を告白したのである。真の言語に到達する過程には「父」と「息子」の権力闘争の闘ぎ合いがあつたのだ。告白の手紙を書き直した事実が示すように、息子は父の精神的な支配から脱することができた。罪意識を克服した後に、彼は真の物語言語の獲得に専心できるのである。

ヴァンの二つの具体的な強迫観念の事例は、テキストのレベルでは「肉体の館」あるいは「アーディスの矢じりの毒が塗られた先端」(252)であるアーダのセクシャリティと、彼の著作活動であった。後者は物語を語る媒体としての言語とそれの基盤となっているロゴス、そしてロゴスとはまったく対立するように見える非論理的な事柄、特に狂気の問題を考察し論ずる仕事である。テクスチャーのレベルでは、この二つは語る事が困難な物語と、言語を獲得して語り手／芸術家として誕生することだ。誕生には「父」の大いなる遺産である西洋形而上学をヴァンが根本から脱構築できるかどうか、自分の「ことば」を見い出せるか否かと同様に、鍵となる。具体的には、中間を排除して硬直してしまっているロゴスの二分法と、それよりはるかに難題である時間の概念を脱構築するのである。前者に対して彼は、テラとアンチテラという一見相対立するような二つの概念に言及して、楽園のようなテラが同時に地獄のような場所でもあることを述べて二項対立を解体した。後者については過去、現在、未来という三幅の絵からなる時間が「頭の中に常に存在し続ける、時間の蓄えである過去」と「それを認識する過程であり、時間の持続、従ってリアリティが付与される現在」(440)の二幅の絵からのみ成り立ち、未来という概念はなく、せいぜい未来は「我々の持続する経験に基づく、また論理と習慣に対する信頼に基づく、仮説上の現在に過ぎない」(441)と考えた。こうして彼は既存の論理を脱構築して、線的时间や死の概念をも排することができたのである。

「父」の言語システムを脱構築する「息子」が時間、死、記憶、意識などの問題に、ますます哲学的かつ論理的に没頭していったことは、一見矛盾するように思えるかもしれない。しかし彼は解体すべきものただ中であってそれをよく知ったからこそ、その解体方法が見えた。浮上するには深く潜水しなければならないのだ。そしてそれ以上に、論理および感覚的傾向の両方を、強く、しかも調和のとれた状態で内在化させつつあったからこそ、それが可能だったのだ。比類ないほど科学に関心が旺盛で、論理的に物事を考えているように見えたアーダは、ヴァンの様にロゴスを脱構築して自分の「ことば」を見出せはしなかった。「科学者 (scient)」の彼女が色々な人体器官の木版画や、外科医が帝王切開によって子宮を引き裂き中から赤ん坊シーザーを取り出す場面の写真が挿入されている大型の医学研究書にうんざりしているのは、示唆に富む。博物学を毛嫌いして、あらゆる肉体的苦痛の存在を否定してやまないヴァンの方が、逆に、引き裂かれた人体に関する記述や描写に極度に興味を覚えた。scient という言葉が暗示するように、アーダは本当は子供の頃から感覚／身体的傾向の強い似非科学者だったのだ。ヴァンとは異なり論理／科学および感覚／芸術的傾向の調和がとれていず、むしろ後者に傾き続けるアーダは、真の語り手／芸術家にはなれなかった。

ヴァンが時間論を書いたのは1922年7月14日、彼が52才の時、4月23日に夫が死に永遠に自分のものとなったアーダを待つ、ホテル「三匹の白鳥」の部屋であった。かつて彼とアーダが彼女の夫にも他の誰にも知られずに密会し、愛しあった部屋である。ヴァンが「空間は我々の視覚や触覚や筋肉の動きと関係があり、時間はおそらく聞くことに関係がある」(425)と思い至り、時間の構造を脱構築しつつあった時、「一度も、少なくとも大人になってからは一度も掛かってきたことなかった」アーダからの電話があった。電話は彼女の「声帯の朗らかな震え、声帯のまさに本質といえるもの」(436)を、何ら損なうことなく彼に伝えた。電話の彼女の声を聞いているうちに、アーダの「生き生きとした熱



心さ、こちらを圧倒するエロチックなばかりの歓喜、自信と活気」がヴァンの記憶によみがえってくる。電話の声は「過去を現在に結びつけることにより」彼の深層に宿る真実の時間についての知覚の中に、「中心部分を、時間の織物の中の唯一の現実である輝き渡る今〔——引用符をとっばらったむきだしのリアリティ (173) ——〕を作り上げた。」(437) 電話のアーダの声により、彼は万物の究極の本質である振動、つまり音楽（エクスタシーのハーモニーによって物質が歌う歌）を、聞くことができたのである。このエロスの至福あるいは法悦にも似た神聖な体験が、語り手／芸術家の創造の源泉となる。

隔離された神聖な場所、彼の愛と芸術の仕事場で、ヴァンは1884年にりんごの木の中で体験した感覚を再び感じ取った。電話の声が「語りえぬもの」を再び現前させ、ヴァンの時間の脱構築を可能にしたのだ。〔その直前から脱構築しつつはあったが、電話の後で考察を繰り返す、それをまとめている。〕そして今、彼は自分の「ことば」を得たことを確信している。彼が知ったように、芸術の真の言語とはロゴスの言葉ではなく、語り手のからだを突き抜けていく「肉体を持った声」なのだ。4月23日がシェイクスピアの誕生日と重なるのは偶然ではあるまい。この日、ヴァンの芸術家としての誕生を促すきっかけとなるアーダが、夫から解放されてヴァンとの合一〔具体的には共に住むこと、隠喩的には電話の声として彼の身体の中に入り、彼自身の「ことば」を気付かせるきっかけとなること〕に向かう。そしてフランス革命の発端となったヴァスティーユ牢獄襲撃の日と重なる7月14日、ヴァンにとって記念すべき革命の日と言えるこの日、「ことば」を得た語り手が物語を語り始める。

ヴァンはアーダ〔女性のセクシャリティ／語り得ぬ物語〕に魅せられ、愛情と憎悪という相反する感情を抱きながら、彼女を求め続けた。しかし今は、彼は肉体としてのアーダではなく彼女の声のリズムに、肉体を持った声の音楽に、魅せられている。そしてこのことを「彼女が完全に、また無邪気な子供のように気づいていないことが、彼には何よりも嬉しく」(437) 思われる。ここで、アーダが全く知らないことでヴァンだけが知っていることが、もう1つあったことを思い出さねばならない。彼女がルセットの自殺の原因であったことである。アーダに対して勝利宣言をしたヴァンの手紙が書かれた後、投函されずに埋められたのは、彼が時間の形而上学を脱構築できたり、自身の「ことば」を得るこの時より少し前であった。憎しみや復讐の欲求を昇華し、物語の言語と語る術をひたすら求めたからこそ、これらのことが可能となったのだ。

ヴァンの語り手／芸術家としての自己成就の過程をまとめよう。彼は「父」の言語世界に参入する。語りたいと切に願う物語を得るが、未熟な語りでは十分に語りつくせない。とはいえ、挑戦的にも禁じられた言語を使い、秘な楽しみを享受したりもする。「父」に従うべしという法を犯し続ける「息子」は、生きるか死ぬかの瀬戸際でいったん罪を告白する手紙を書くが、それを罪の事実の痕跡も残さぬほど大幅に書き直す。自分を客観視することで、挑戦と罪意識の強迫から脱することができたのだ。その結果、語りの言語の探究に専心してゆける。ルセットの死を悲しむアーダの手紙を読み、語るべき真の物語を知り、それが自分にだけ語れることを知る。アーダに勝利した喜びを告白した復讐心も露な手紙を地中深くに埋めたことからわかるように、それまで強迫観念となっていた裏切り続けるアーダ〔彼女のセクシャリティと、もどかしくも語りえぬ物語としてのアーダ〕に対する憎しみと復讐心も乗り越えた。人間の真実や普遍的な問題を追求する芸術家／語り手

として、復讐以上の喜びを知ったのだ。そしてクライマックス、電話でアーダの声を聞くことにより、芸術の真の言語とはロゴスの言語ではなく、語り手のからだを通過していく肉体を持った声であることを知る。またこの時、西洋の形而上学——ロゴスと線的時間の概念——を脱構築できる。こうして語りの芸術家としてヴァンの個が完成されたのだ。

『アーダ』の書き直された手紙と投函されなかった手紙に隠蔽された告白には、ヴァンが父と妹に対して抱いた憎しみや復讐心が暴露されていた。『アーダ』のテクスチャーの文脈では、これらは所与の言語とその基盤にあるロゴスに対する挑戦／復讐心と、語ることが困難な物語に対する語れぬがゆえの憎しみと復讐心である。『アーダ』の主人公ヴァンはこれらの感情を昇華することで、語りの芸術家として誕生できた。これらの感情こそが誕生のための原動力だったのだ。そして、父のディスコースに対する挑戦の罪意識を克服し、語りえぬ物語に対する愛と憎しみの相反する感情を乗り越えて自分と世界を客観視できるようになり、語るべき真の物語の存在とそれを語ることの魅力を知ることが、最後に自分の「ことば」を得て語り手としての自己が完成される主人公にとっては、重要な転換点であった。その契機を示すために、書き直され、投函されなかった二種類の手紙という装置が巧みに使われていたのである。

#### 注

1. Jeremy Tambling, *Confession: Sexuality, Sin, the Subject* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1990) 2.
2. Vladimir Nabokov, *Ada or Ardor: A Family Chronicle* (1969; London: Penguin Books, 1971) 244. 以後、引用は本文中の括弧内に示す。斎藤数衛訳『アーダ』(1977; 早川書房, 1990) を参考にさせていただいた。
3. D. Barton Johnson, *Worlds in Regression: Some Novels of Vladimir Nabokov* (Ann Arbor: Ardis, 1985) 129.
4. Paul Bruss, *Victims: Textual Strategies in Recent American Fiction* (Lewisburg: Bucknell Univ. Press, 1981) 97参照。
5. Ellen Pifer, *Nabokov and the Novel* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1980) 137.
6. Brian Boyd, *Nabokov's ADA: The Place of Consciousness* (Ann Arbor: Ardis, 1985) 126.
7. Boyd, *Nabokov's ADA* 126.
8. 拙論 “Humbert Humbert As a Fully-Realized Artist” 参照。
9. Bruss, *Victims* 96.
10. Tambling, *Confession* 210.